社会関係資本と公共空間の再構築を通じた被災地の復興

――岩手県陸前高田市におけるコミュニティの再建支援――

東日本大震災に関連した緊急を要する調査・研究課題の
中間報告会

2014.3.10.　お茶の水女子大学

三浦徹・熊谷圭知・杉田孝夫・小林誠・
加賀美登美代・森山新・荒木美奈子＋TA＋実習学部生

本年度の調査研究

「陸前高田市訪問：6回」＋「茨城県・福島県沿岸被災地訪問：1回」

* ①2013年5月11－12日（教員1名、学生14名）　＊パンラボ主催「パン屋さんと行くりんごの花摘みツアー」に合流。訪問先：米崎小仮設住宅、りんご農家ほか
* ②2013年6月7－10日（教員1名、学生6名）　＊米崎小仮設住宅、米崎小体育館にて「2年間の活動写真展」展示の手伝い、ほか
* ③2013年7月12－16日（教員2名、学生7名）　＊米崎小仮設住宅、長洞元気村、竹駒小仮設住宅、復興支援団体SET（広田町）ほか
* ④2013年9月13－16日（教員1名、学生6名）　＊米崎小仮設住宅、牡蠣養殖ツアー、和野仮設住宅ほか
* ⑤2013年11月1日－5日（教員2名、学生9名）　＊米崎小仮設住宅、陸カフェ、りんご農家、復興支援団体SET、桜ライン311ほか
* ⑥2014年2月8－11日（教員1名）　＊銚子・那珂湊・磯原・小名浜・豊間など
* ⑦2014年2月13－16日（教員2名、学生4名）　＊米崎小仮設住宅、2012年度報告書の受け取りと配布、りんご農家、気仙町今泉集会所ほか

2013年5月訪問

* パンラボ主催「パン屋さんと行くリンゴの花摘みツアー」にジョイント（リンゴ農家の摘花ボランティア、仮設住宅住民との交流会など）

2013年6月訪問

仮設住宅「2年間の活動写真展」運営支援（左下）など。右上：接ぎ木した一本松、右上：瓦礫とクローバー、右下：お茶っこカフェパネルを見る住民

2013年7月訪問

* 米崎小学校仮設住宅に加え、長洞元気村、竹駒小学校仮設住宅なども訪問・調査

2013年9月訪問

佐々木学さん主催「雪解け牡蠣ツアー」(ブランド化事業、体験型ツアー)、仮設住宅連絡会、和野仮設住宅などを訪問・調査

2013年11月訪問

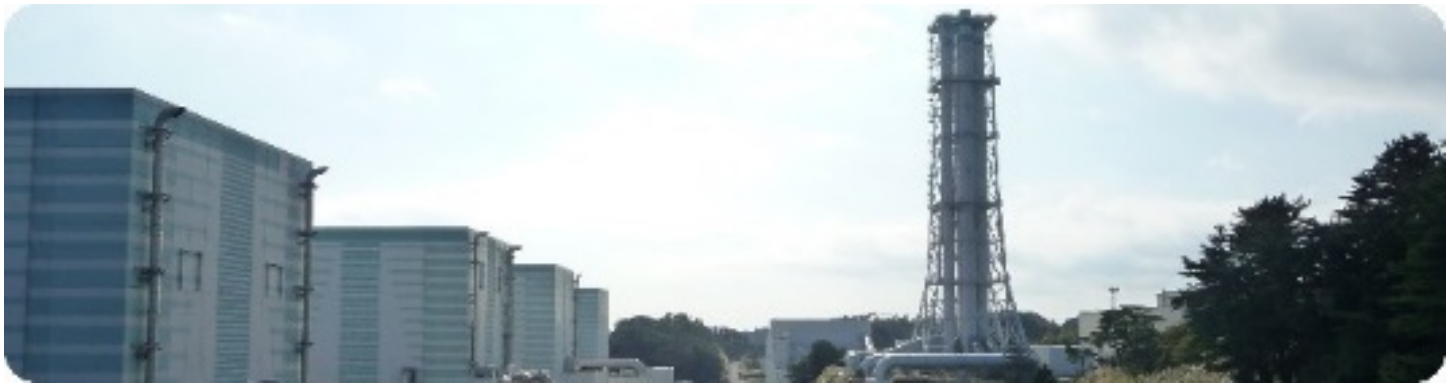
＊りくカフェ、リンゴ農家、復興支援団体SET、桜ライン311などを訪問･調査

＊JICA研修外国人を招いたセミナー

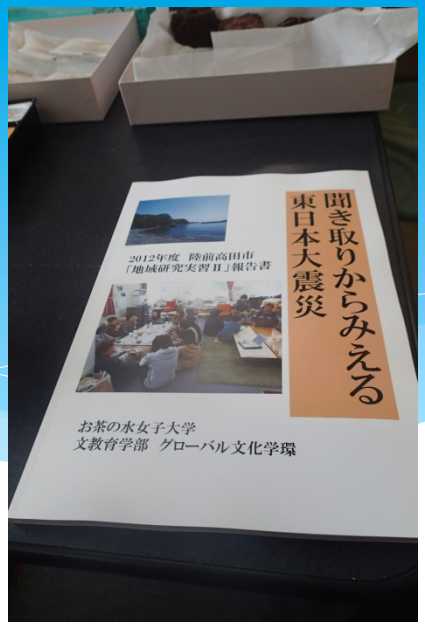
2014年2月訪問

* 茨城県・福島県の沿岸被災地訪問（銚子・鹿島・大洗、大津・那珂湊・東海村、小名浜・豊間・福島第二原発など）

福島第二原発（東京電力HP）

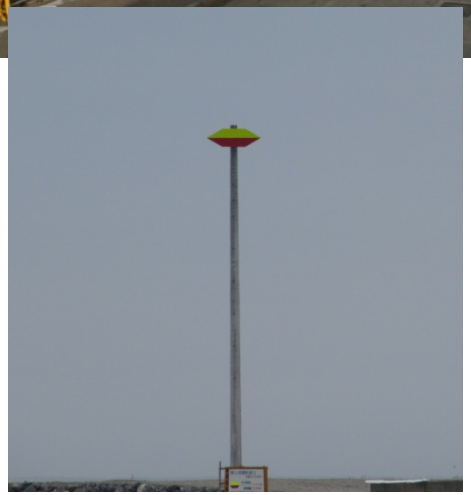


2014年2月訪問



* 米崎小学校仮設住宅などで2012年度報告書を配布、リンゴ農家、気仙沼市今泉集会所など

陸前高田市の現況



* 災害公営住宅の建設も手がついていない
* 12メートルの防潮堤の高さをしめすUFOのような標識（防潮堤建設の是非で議論百出）

陸前高田市今泉地区の高台移転

* 高台移転は基本的には進んでいない。
* 移転の進む住民とそうでない人たちとの格差

復興をめぐるさまざまな問題点

* 高台移転をめぐる問題：用地取得難、造成の遅れ、建設費の高騰、区画整理による換地事業＝浸水した土地の評価額の低さ…
* 堤防工事、区画整理事業をめぐる住民合意形成の過程　（はじめに計画ありき、トップダウン的手法）
* 自力での住宅建設が困難な高齢者⇒災害公営住宅を希望⇒未着工
* 仮設住宅の常態化　⇒高齢者の終の棲家に？
* 仮設住宅間の「支援格差」
* 震災報道の減退と偏り（復興＝変わったことにニュースバリュー／変わらないことは報道されにくい）
* 雇用の不足と偏り／生活基盤の回復の遅れ⇒住民の流出
* 住民の心のケア　（喪失感の大きさ：容易には埋め合わせられない）

考察1:「新しい公共」の概念――まずは柔らかな繋がりから

仮設住宅女性会、カメラマン、スターバックス、
地元写真店、ボランティア、「外人さん」・・・
内外の協力による写真展の「集い」 →高田音頭
チームワーク

考察2:「新しい公共」の手がかり
米崎小学校仮設住宅自治会長から
お茶大生へのメッセージ

陸前高田に来てくれてありがとう。

被災地に関心を寄せてくれてありがとう。

笑い方を忘れそうな人たちに笑顔を届けてくれてありがとう。

被災地の現状を長く知り続けてくれてありがとう。

多くの聞き取りと書き起こしをしてくれてありがとう。

悲しさと悔しさと、そして笑顔を感じてくれたと思います。

災害の結果というものを感じていただけたと思います。

でも、自分たちと知り合ったことで、被災地に住む人をかわいそうと思わないでください。

自分たちがみなさんに望むことは、自分たちの愚かさを繰り返さないで欲しいということ。

これから皆さんは社会に出て、日本中に活動の場を移します。

日本が狭い島国である以上、どこにいても台風や地震と無関係ではいられません。

このことをいつも頭の片隅に置いてください。

このことをこれから知り合う人たちにも伝え、一緒に考えるきっかけにして欲しいと願います。

いつか来ると予告されていた災害に「今日の続きはいつもの明日」と何もせずに来た自分たちの後悔を皆さんは繰り返さないでください。

お願いします。

岩手県陸前高田市 米崎小学校仮設住宅　自治会長　佐藤一男

（『グローバル文化学会報』第6号（2014/03/24刊行に寄稿）

考察3:「内部者」の中の「外部」、「外部者」の内部化

* 「自分は被災者ではない」(りんご農家のK氏の談)
* 被災者であっても「家を流されていない」「家族を失っていない」人たちが感じる負い目
* 被災体験そのものからの疎外である「サバイバーズ・ギルト」感覚
* 陸前高田市主催の漁業従事者の全国募集イベントに参加わずか2名
* 吉田和子さん:陸前高田に移住、流された医療関連施設のあった地域に、地域の主婦たちを組織して「りくカフェ」を主催
* 久保田崇さん:内閣府から副市長に
* 土方剛史さん:盛岡から移住して佐々木学さんの牡蠣事業をプロデュース

りくカフェ(東北電力・東日本大震災復興情報レポートHP)

考察4：被災地の復興に果たす「外部者」の役割とは

* 2011～12年　陸前高田市の人口の10倍以上のボランティアが訪れる　中には住み着いて活動する人も（復興支援団体SETの三井俊介氏、など）
* 2013年～　ボランティア：減少
* 仮設住宅間に支援格差（仮設住宅連絡会の調査）
* 震災ツーリズム　　経済効果？　外部者の関心をつなぎとめる機会としての期待？
* 「私たちは10年後には死んでしまう…陸前高田の復興を担うのは被災者ではなくその状況を知って外から来てくれる人」（竹駒小仮設住宅の住民の談）
* 外部者の存在⇒コミュニティ復興の刺激となる？
* 被災地の現実と葛藤を、外に伝えることの重要性

考察5：外部者が内部者に静かに「耳を傾ける」ということ

* 2012年度報告書の反響の大きさ 『東海新報』2014/2/22報道→地元図書館からの寄贈依頼
* 継続性と信頼関係 「また来てくれたの」「気心の知れた学生さんに聞き取りを行ってもらいたい」
* コミュニティの減退の中で、外部者が関わり続けることの重要性。リレー式の実習 3年間15回参加学生50名以上
* 内部者／外部者の二分法を越えて

東海新報　第16901号　平成26年(2014年)2月22日(土曜日)　日刊(月曜日休刊)　(6)

語りから探る教訓

震災体験を聞き書き

お茶の水女子大が発刊　垣間見える防災の心得

お茶の水女子大学（東京都文京区）文教育学部グローバル文化学環の学生と教員らによる地域研究実習報告書「聞き取りからみえる東日本大震災」がこのほど完成した。陸前高田市米崎町に暮らす被災者らの体験を聞き書きしただけでなく、「聞き取り」をめぐる課題、学生による海外での被災地報告が盛り込まれるなど、内容の濃い1冊に仕上がった。

この報告書の作成は米崎小仮設住宅自治会長の佐藤一男さん(48)からの依頼で実現した。同大の学生と教員は、平成23年から仮設住宅で「コミュニティカフェ」の企画・運営をサポートするなど、たびたび現地での実習活動を展開。交流を通し、住民と学生の間に信頼関係が育まれていたという。

このため佐藤さんは「見知らぬ人やメディアにあれこれ聞かれたり、通り一遍のアンケートに答えるより、気心の知れた学生さんに、堅苦しくない雰囲気の中で聞き取りを行ってほしい」と申し出、同大もこれを受け入れた。

聞き取りは24年春から合計4回、延べ12日間にわたって実施。学生たちは被災者の心情に配慮しながら、無理に話を引き出そうとしないよう、黙って耳を傾けることに徹したという。

学生らは聞き取った内容を①震災当日の体験②被災後の行動③避難所での生活④仮設住宅での生活⑤伝えたいこと・教訓――の5項目に分け、第3章にまとめた。それぞれの項目では、問題点やトラブル回避のための提案、特に伝えたいことなども記されている。

話の中には当然、深刻で重い話題も多く含まれる。同大人間文化創成科学研究科の熊谷圭知教授（59）は「語り手のプライバシーも考慮にいれつつ、これらの話をどのように受け止め、記述するかという面でとても苦労した」と話す。

この点をふまえ4章では「震災体験の聞き取りをめぐる課題」として、聞き書きの手法やデータの処理と管理方法、今後の課題などを提示。学部生がインタビュアーとなったことの意義などについても述べた。さらに海外留学している学生が、現地で報告会を実施した際のことについてもまとめられている。

佐藤さんは同書を読み、「当事者ではない第三者の目から見て、初めて分かることもある。忘れかけていた教訓や原則が浮かび上がってきた」と話し、同大の協力に謝意を示す。また、この報告書を参考に防災計画への提言書なども作成していく考えだ。

熊谷教授は「お話を聞かせてくださった方の多くは、自らの震災体験をそなえから来た若い世代に伝えたい、もっと広く伝えてほしいという思いがあったと感じる。それは私たち聞き取り内容の分析・考察に力を尽くしたいという思いに感じていると思う」といい、引き続き取りをめぐる課題」との責務であり、学生たち一人ひとりも同じよとしている。

お茶の水女子大の文教育学部生らがまとめた報告書。米崎小仮設住宅の集会所で閲覧できる

今後の展望

* 2014.3.14.　第3回震災フォーラム「被災地の復興に果たす「外部者」の役割と『新しい公共』の形成」

  午前は派遣学生の報告

  午後は、小川光一さん（桜ライン311理事）、吉田和子さん（りくカフェ主催）、久保田崇さん（陸前高田市副市長）の3ゲスト講演と桜ライン311のドキュメンタリー上映
* 2013年度報告書：現在作成中
* 2012年度報告書に生かしきれなかった聞き取り元データの再整理と分析
* 復興の過程と仮設住宅住民の意識の変化の追跡
* NGOの活動、外部支援者の体験、地元住民の評価：さらに聞き取りを継続